Essay

哲学論
―子どもの発想は哲学的であるのか―

権 安理（コミュニティ政策学科教員）

はじめに

私は大学で、公共哲学という講義を担当している。公共哲学は、ハーバード白熱教室で有名なマイケル・サンデルの専門なので、かつてよりも世間に認知されてきたという実感がある。だが他方で、哲学が一般学生を遠ざける学問である、もしくは“少し変わった人”が求める“屁理屈的な学問”であるとも考えられて（しまって）いることもあり、その哲学を細分化した公共哲学ともなると、かなり難解な印象を与えるかもしれない。

このエッセイでは、私が考える哲学のエッセンス、もしくは「哲学とは何か」について、可能な限り平易に説明することを目的としている。その意図するところは、公共哲学を説明する前に、まずは哲学について大まかな説明をしておこうというものである。そして結論から述べておくと、「哲学とは知で知を超えていくことである」と私は考えている。

1.「そもそも論」

哲学が、変わった人が屁理屈をこねまわすものだと考えられる理由の一つは、それが「そもそも論」を展開することによるだろう。例えば、コミュニティの現状や課題を分析したり、コミュニティ政策を論じたりする前に、「そもそもコミュニティは必要？」とか、「コミュニティは最低何人でつくれる？」などと考えたりもする。さらに極端な場合は（ちなみにこれは大哲学者デカルトの場合だが）、「自分が居る世界なんて実在していなくて、全て自分の脳内妄想かもしれない」とまで勘繰ったりする。

このような意味で、哲学が「そもそも論」を展開する学問であることについて異論はない。難しい言葉で言い換えると、「様々な事象をその前提まで含めて懐疑の対象とするという意味で批判・批評する」のが哲学なのである。そうであるから、哲学はしばしば、子どものような問いや発想をすることだと思われる。「なんで宿題をしなきゃいけないの？」「どうして寝なきゃいけないの？」「どうして生きなきゃいけないの？」。だが、子どもは哲学しているのだろうか。哲学は子どものような発想を

することなのだろうか。

2.「セミが笑っている」

セミと子ども

例を挙げて考えてみよう。私が小学生だったときに、自分より幼い子どもの「子守り」をしたことがある。所沢の野山で育った私に都会っ子が託され、クワガタやカブトムシ採りの方法を伝授するように頼まれたのだった。私はその某ちゃんと一緒に、武蔵野の雑木林に行くことになった。

夏真っ盛りのことである。セミがここぞとばかりに鳴いていた。ミンミンゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシ……私は鳴き音で聞き分けることができる。「何ゼミが鳴いているか分かる？」。教えようとすると、某ちゃんはこう言った。「お兄ちゃん、セミが笑っているね」。当初はふざけているのかと思ったが、某ちゃんは真剣だった。セミが出す音、森に共鳴する響きを聞き、まるでディズニーの世界のようにセミが私たちを歓迎していると考えて、そう言ったらしい。

だがもちろん、セミは笑わない。それは鳴く（なく）のである。でも他方で、こうも考えた。確かにセミが私たちを歓迎しているのなら、それが「笑っている」と表現しても良いかもしれない。ところが、私は「セミは鳴くものである」という常識にとらわれ、それを全く疑わないので、セミが笑っているなどとは考えもしない。

そうであるとするならば、某ちゃんは「そもそも論」を展開するかのように常識を疑っているという意味で、「哲学している」のだろうか。「セミってそもそも本当に鳴いているの？　それとも泣いているの？　笑ったりしないの？」。

哲学と子ども

某ちゃん的な発想をする子どもが「哲学している」と考えるか否かによって、哲学観がかなり異なってくると、私は（いささか強く）思っている。そして（誤解かもしれないが）、著名な学者を含めた多数は、「哲学している」と考えているように感じる。

だが、私はそうは思わない。子どもは多くの場合、常識を疑ったり、批判しているのではない。常識がないのである。常識がないことと、常識を疑うことは全く異なる。某ちゃんは、「セミが鳴く」が正しい言葉づかいだと知らなかっただけである。あるいは、「鳴く」を「泣く」と勘違いしたために、「泣くのであれば、笑うこともある」と思ったのだろう。これは大胆な発想であると言うよりも、むしろ知識の欠如である。

ただし急いでつけ加えれば、私は某ちゃんが知識を欠いていると揶揄しているのではない。セミが笑ってウェルカムしているという某ちゃんの発想に驚き、とても

面白いと感じた。だからこそ、今でもこのエピソードをはっきりと覚えているのだ。

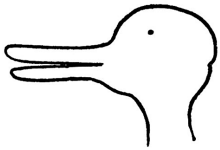
某ちゃんはもしかすると詩人かもしれない。あるいは芸術家であるかもしれない（私の詩人観や芸術家観は間違えている可能性もある）。そもそもセミからすれば、恐らく音を出しているだけなのに、人間が、正確には日本人が、勝手に「鳴く」という言葉をあてているにすぎない。だからそれを覆す某ちゃんは、昭和風に言えば「あっぱれ」、今風に言えば「一本！」である。

だが、それでもやはりこう言いたい。某ちゃんは哲学していない。某ちゃんの発想は哲学的ではない。哲学は、知識の欠如によってユニークな発想をすることでもないし、知識の有無とは無関係に奇抜もしくは斬新な考え方をして常識にチャレンジすることでもない。知によって知を批判すること、知によって知を乗り超えることこそが、哲学であると思っている。

これは優劣の問題ではない。このような哲学は素晴らしいと主張しているのではない。価値判断ではなく、単にそういうものだという事実認識の問題である。某ちゃんは、決して哲学してはいないが、とても面白い発想をしている。私はこう考えている。

3.「ウサギとアヒル」

知で知を超えていくこと ── この点についてもう少し考えるために、セミに代わってウサギとアヒルの例を出そう。そうは言っても、動物としてのそれではなく、ここで対象となるのは「ウサギ／アヒル」反転図である。ウサギに見えたり、アヒルに見えたりするトリックアート的な絵である。



ウサギ／アヒル反転図[1]

私たちは、ここにウサギとアヒルを同時に見ることはできない。だが、ウサギに見えたり、アヒルに見えたり……と「反転」を経験することはできる。つまり、あるときはウサギ「として」、またあるときはクルッと反転してアヒル「として」見ることはできるのだ。この反転の経験こそが、トリックアートをそうたらしめるものである。

では、「として」見るとはどういうことか。「ウサギを見る」と「ウサギとして見る」にはどのような相違があるのか。結論から言うと、後者は「他に見える可能性があることを知っていながら、それとして見る」ということだが、前者は必ずしもそうではないということだ。私は今それをウサギとして見ているが、（はっきり自覚はしていなくても）それがウサギでない可能性を知っている。あるいは、私にはウサギに見えるが、他者にはそう見えないかもしれないことを暗に分かっている。「として」見ることには、このような含意がある。

では、「として」見ることを可能にする反転はなぜ起きるのか。どういうきっかけで反転するのかについては、私は門外漢であり詳しいことは分からない。だが、「なぜ？」ということに関連して、確実に言えることが一つある。それは、仮にウサギを知らなかったらウサギに見えることはなく、アヒルを知らなければアヒルには見えないということだ。

当然のことを言っているように思えるかもしれないが、ここから重要なことが帰結する。それは、反転は知を前提とするということである。ウサギしか知らなければ、反転してアヒルに見えることは絶対にない。知があれば反転するとは限らないが、知がないと反転は不可能である。

おわりに

哲学に戻ろう。このエッセイの冒頭で私は、「哲学とは知で知を超えていくことである」と述べた。「セミが鳴く」ことを知っていて、それを疑うことや、あえて「泣く」と言ってみることは哲学的であるかもしれない。だが、某ちゃんは哲学とは無縁である。今ここで持っている自分（たち）の知や認識を、たくさんある可能性の一つにすぎないもの「として」見ること —— ここにおいて、「そもそも論」としての哲学が始まる。だからこそ、哲学にまずもって必要なのは知である。

もちろん知があれば、哲学ができるとは限らない。だが知は哲学するための条件であるし、哲学がしばしば「哲学史」のお勉強である理由もそこにある。「自分の考えを主張したいのに……、哲学対話したいのに……、大学の哲学の授業のほとんどは哲学史でつまらない」という意見を巷で耳にすることがある。だが、哲学史は知の反転の歴史≒物語（[hi]story）である。こう思って哲学史を勉強すれば、多少は面白くなるかもしれない。

哲学とは知で知を超えていくことである。したがって、哲学に知は必要である。少し言葉遊びをしておくと、そして謎めいた言い方をしておくと、知恵や知性には知識が不可欠なのである。私は、哲学をこのようなもの「として」考えている。

注

(1)　ウィトゲンシュタイン著，藤本隆志訳，1976，『ウィトゲンシュタイン全集8 哲学探究』大修館書店，385頁.